

次代へ向けての胎動

2019年10月に獨協大学は創立55周年を迎えます。

この年を未来へと続く新たな大学のチャレンジのスタートの年にしたいと思います。

今、大学と大学教育を取り巻く環境には大きな変化が見られます。

次代に向けて動き出した最近の獨協大学の取り組みについてお知らせします。



獨協大学学長 犬井 正

1947年生まれ。73年東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程修了。86年獨協大学教養部専任講師、88年教養部助教授、90年理学博士（筑波大学）、91年教養部教授、94年経済学部教授。
本学における役職歴は、89年教養部教務主任、96年免許課程委員長、02年経済学科長、07～09年学生部長、10年経済学部長（07～13年3月環境共生研究所所長兼務）。12年4月1日より学長に就任。

社会科学・人文科学は 不要な学問なのだろうか

世間では教員養成系および人文社会科学部の「不要論」や「廃止論」が声高に言われ、人文社会科学部の見直しや改組を積極的に進めている大学もあります。こうした動きは、人文社会科学を中心とした文系総合大学を任ずる獨協大学では、とても他人事とは思えません。獨協大学はこれまで、教養教育を重視することなく、実践的な学問を重視していくための組織改革やカリキュラム改正に取り組んできました。獨協大学では、母体になった獨逸學協會學校設立以来、実学的な教育と教養教育に取り組んできた実績があります。本来の実学というのは、単に実用的な知識ではなく、社会が直面する問題を発見し、解決する知見を生み出す「学」なのです。物事に対する洞察力を深め、多様な価値観を尊重し、そして自ら人間形成に努めるために、主に人文社会科学に立脚する幅広い教養こそが不可欠なのです。もちろん、職業教育といった視点からその専門性を生かし、社会のニーズと向き合う必要もあります。しかし、それと同時に、大学は学問を通じ、その時代ごとの産業界からの要請とは別に、普遍的に人類の存立・発展、社会経済システムの基盤のために知の創造・伝承を行う場でもあるのです。人文社会科学こそがまさに人間形成や、社会発展の基礎を築くことになるのです。「大学は学問を通じての人間形成の場である」という建学の理念を揺るぎ無く掲げ、これからも自信と確信をもって歩んでまいります。

中央棟にアクティブ・ ラーニングを支援する 「クレアス」が誕生

グローバル化・国際化に対応した教育をはじめ、授業の内外で自分の頭で考え、肌で感じ、自分たちが目指す方向や、ゴールに向かってどう努力すべきかを考え、実践していく。これこそが真の「アクティブ・ラーニング（能動的学修）」ではないでしょうか。獨協大学は、これまでも、図書館や天野貞祐記念館にあるICZ、MM工房など、さまざまなアクティブ・ラーニングに資する場を提供してきました。今回、国際交流センターを2階に移転し、ICZに隣接させて利便性をより一層高め、国際化や外国語学習の効果を上げるようにしました。また、中央棟1階の東棟と西棟を結ぶメイン通路は、長い間改装中になっていましたが、このたび新しく教育研究支援センターの自律学習支援スペースとしてクレアス（CLEAR）が開室されます。学生の自律学修を支援するために、コンピュータや大型プリンターなどをはじめとして、MM工房の機能も受け継ぐようなインテリジェント空間に変身しています。今後もしこうしたことを継続拡充していくことが必要です。2017年に「キャンパス再編」の集大成となる「創立50周年記念館（西棟）」が建設され、アクティブ・ラーニングを可能にし、「ラーニング・ commons」として教育効果を向上させる最新機能を備えた教室棟として、本学の建学理念をより具現化する施設になりました。

2019年度から100分授業が導入さ



れますが、大学にとって大事なことは、主体性をもってアクティブに学び行動しようとする学生に対して、授業やカリキュラムの改善、教職員の懇切な対応、施設・設備面の拡充など、いかにして質の高いリソースを提供できるかということです。

快適な環境と 食環境改善へのチャレンジ

かつて大学は、社会から隔絶していることが当たり前だった時代もありましたが、今は地域社会の一員として、その使命を自覚的に考えていかなければなりません。これからの世の中で大学自身がどのような存在であるべきかを考えるとき、自然環境の多様性を認識し、環境と共生することを抜きにはできません。だからこそ、「人と建物と自然が調和したキャンパスづくり」を継続し、そのキャンパスで学ぶことが、人間性をさらに豊かにしていく土壌になるという循環を育んでいきます。自分の足元の環境をきちんと見つめられない人間には、世界の環境を変えることなど到底できません。

キャンパスライフをより豊かにするには、食環境の充実に思いを馳せることも大切です。1000分授業を導入するにあたって、退校時間をできるだけ遅くしないようにと考え、休み時間や昼休みを短縮することも考えました。しかし、授業時間が伸びて休憩時間や昼食時間を短縮すれば、急いで簡便な食事で我慢したり気分転換ができなかったりで、ストレスがたまり学修への

意欲も低減してしまいます。そう考えて、昼休み時間などは原則これまで通りにしました。そして長年、改善要望が強かった学生食堂の施設・設備とメニュー面の検討なども行ってきました。2011年11月実施の「マイナビ大学生の窓口」によると、大学生男女1010人に対する調査によると、学食をまったく利用しない学生は、およそ半数に上っています。「食費節約のため、お弁当を持参している」「学食が混むから席を探すのが大変で、次の授業に間に合わなくなる」などの意見がありました。獨協大学に限らず、通年経営が困難な学食の経営はさらに難しい局面に立たされています。こうした中で、獨協大学の学食は、一見すると広そうに見えますが、実はデッドスペースが多く混雑が日常的状态になり、利用が敬遠されつつありました。今回、行列ができて混雑する券売機の場所を分散化することや、厨房と座席スペースを一体化するなど快適な食事空間になるようリニューアルしました。まだ使えるテーブルや椅子はできるだけ再利用しながら、利用者の回転を速くするエリアや一人で食べられるエリア、ソファでゆったりと食べられるエリアなど様々な改善をしました。栄養面を考慮した温かくて、リーズナブルなメニューが提供できるようにに業者の方をお願いしています。食育のためのコストを大学がどのように補填できるのか、チャレンジを続けていきたいと思っています。それには学生と教職員が学食を利用し、前向きな意見を出し合い「快適な食事空間」に育てていくという姿勢が大切なのでしょう。